

# 津波対策 – 敷地に遡上する津波の敷地内滞留時間と敷地内作業の成立性 –



ワーキングの詳細  
はこちらから

## 論点No.225

防潮堤を越えて敷地に流入（遡上）する津波として、標高+24mの津波を想定しているとのことだが、海水がどの程度の時間、敷地内に滞留すると評価しているのか。また、流入する水や砂により、可搬型設備を用いた事故対処ができなくなることはないのか。

第21回ワーキング  
(2022.7.29) で議論

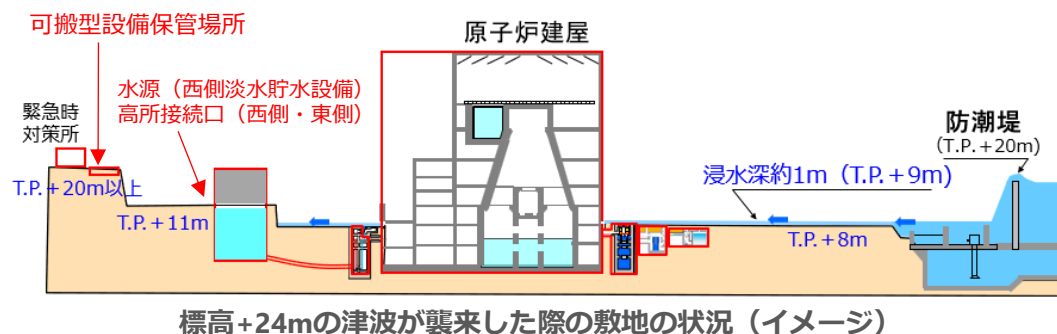
## ワーキングチーム検証結果

防潮堤を越えて敷地内に流入した津波は、構内排水路及び防潮堤に設置する排水設備により4時間未満で排水可能であること、また、可搬型設備による原子炉への注水等の必要な活動は、遡上した津波が到達しない高所で実施することを確認。

## ワーキングチーム検証結果（抜粋）

### ○可搬型設備の保管場所及び活動場所の高さと津波高さとの関係

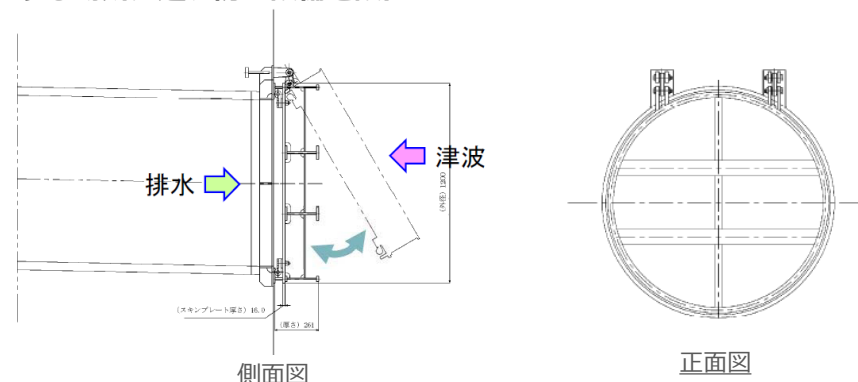
- 防潮堤を越えて敷地に流入（遡上）する津波として想定する標高+24mの津波が襲来した際、敷地の浸水深は約1m（標高+9m）であり、**標高+11m以上の敷地には到達しない。**
- 可搬型設備の保管場所は標高+23m及び標高+25mの高所
- 可搬型設備を使用した原子炉への注水は、**標高+11mの水源及び接続口を用いて実施可能**であり、対応に際して津波により流入する水や砂の影響は受けない。



標高+24mの津波が襲来した際の敷地の状況（イメージ）

### ○敷地に流入した津波の排水

- 防潮堤の内側に流入した津波は、構内排水路及び防潮堤に設置するフラップゲート（逆流を防止する機構を持った排水口）によって排水することができる。
- 標高+24mの津波による流入量であれば、防潮堤のフラップゲートのみでも4時間未満で排水可能な排水容量を有する。
- 構内排水路からの津波の流入を防止するため、**防潮堤の地下部を横断する場所に逆流防止設備を設置**



排水路逆流防止設備の構造